

# 欲生心の象徴的自覚

1

本多弘之

*honda hiroyuki*

われら有情は、悩む存在である。深く傷ついたり場合には、自分自身で立ち上がることでできなくなる。「苦悩の衆生」と仏陀が呼びかけるのは、そういう悩み深い有情を、その苦悩から何とかして解放したいという慈悲心がうずくからであろう。

その衆生の苦悩の原因は、時折ぶつかる外側からの事件や災害によるものだけではない。仏法はインドの神話的な（いのち）の感覚を

取り入れて、六道流転に由来する（宿業）に、現在の苦悩の見えざる起源があることを語りかける。六道を流転するということは、地獄から天に至るさまざまな状況を、流され転がされるようにして移ろいながら生きていくことを表している。生命の状況は、自分で選ぶというより、投げ出され転げ落とされたごとく与えられる。その状況を生きるほかないという面があるということ、流転と言うので

あろう。

仏陀は、この苦悩を引き受けて生きている存在状況の根源に、こういう苦悩を生み出す根本原因を発見した。それを苦悩の家を建てる「大工」を見つけた、と宣言した。その大工とは、自己を自我だと考える意識の闇（それを唯識論では「末那識」と名づけている）が、それが常にはたらいで存在を苦悩の実存と感ずるようになっているのだ、と。



この闇を晴らすには、この意識のはたらきが本當のあり方を知らないことを自覚させ、本来の明るい自己自身を回復すれば良いと気づいた。これが、シッダールタをブツダにした覚醒であった、と言われる。このような明快な人間の意識転換が、人間に起こりうることを証明し、そのことを人類の宝として、教えの言葉によって語り出したのである、と。

ところが、これを文字どおりに聞き当てる、それを自己の体験にすることができるか。仏の教えを自己の救済体験として受けとめようとする営みが、教えの言葉の意味を解釈し、その言葉に対応する自己の体験をまた記述していくところに、人間の闇の深さはいよいよ明るみから遠くなっていく。釈尊が開悟された明るみを、真に体现するとはいかなることかを求めて、仏弟子達の悪戦苦闘が続き、仏教の歴史が求道の歴史として刻印されてきた。

その流れを、根本の釈迦の体験に追随しようとしてさまざまに解釈が分化してきた歴史と見る立場に対し、より根源へそしてより広大な一切人類を包みうる原理へと遡源したのだ、と見る立場が現れた。曾我量深が宣言した「親鸞の仏教史観」とは、一切人類に呼びかけるような根源的な原理、それが釈尊をも動かして如来にし、その原理を『大無量寿経』の本願の教えとして説かしたのだ、という見方である。人間の歴史がだんだん変化

し発展するというよりも、精神の歩みは、より根源へ、そしてより広大な立場へと、掘り下げられていくのだ、という見方である。

一般的な見方は、歴史上に起こった事柄が、時代情況が変化し、思想的な理解や表現が変わること、だんだん変質すると考えられている。源泉の水が流れていくことによつて、他方から流入する支流の異なる成分で濁るようなものと考察されていることである。こういう考えを曾我量深は、「唯物論的歴史観」だと言う。精神の営みをよく観察すると、決してそういうものではない。むしろ本来の源泉の本質をより明らかに、より真実に把握し直し、自覚し直していくのが、本當の求道の歴史なのだ、と言うのである。真の仏教史観は、根源の真理が次第に掘り下げられ、自覚されてきた歩みである、と。これを「本願の歴史観」とあると言う。

親鸞の歴史観は、本願が時代や社会の変化を突破し情況の差異を乗り越えて、常に濁世の凡夫によつて本願が聞き届けられてきた歴史であると言うのである。人間が変わろうとも、そしてその人間が生きている情況がいかに変遷しようとも、人間の愚かさや有限性に突き当たるとき、無限なる大悲の前にただ頭を垂れて許しを請い、一切を挙げて無限なるはたらきに任せるほか無いと信じられるのである。源信僧都が表白したように、「予がごとき頑

魯のもの」という悲しみにおいて、自力の菩提心の催しがどのように個人の差異を主張しようとも、平等の大道たる本願の眼に帰せざるをえないのであろう。

曾我量深が言う唯物論的歴史観とは、少し視点を変えれば、人間存在が「宿業」を引き受けて生きる苦悩の有情であることを忘れ、理性や合理的な思考で人間的自由を生きているのだ、と教える近代的人間観と重なっているのではないか。宿業という限定を知るということは、人間の愚かさの背景は、無始以来の流転に元を発して、「常没常流転」の身をただ知っていることと知ることである。この根源的な身の限定の背景によつて、その苦悩とともに歩み続けるような深い悲しみのささやきとして、「大悲願心」が聞き当てられてくるのではないか。

本願の歴史を信ずるのは、人間がそれぞれ宿業という重荷を引きずっているけれども、その宿業の繫縛こそが、大悲のはたらきを引き受ける場だからであらう。それぞれ異なる宿業に傷つきつつ、大悲の前に平等の解放が開かれる。「宿業本能の大地」と曾我量深が表現するのは、この苦悩の身こそが、歴史を貫く願心の場合だからである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)